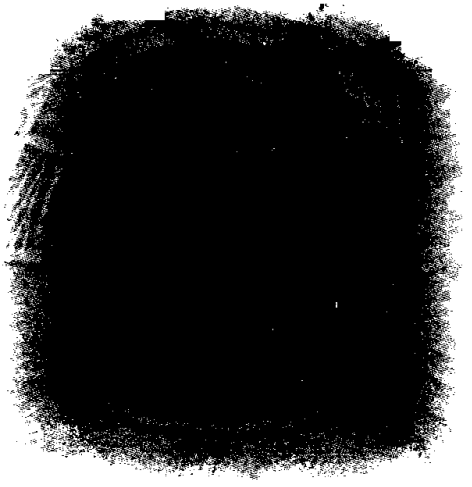
丸山薫全集 5

丸山薫全集 5



角川書店

丸山薫全集　5

1977年3月31日　初版發行

著　者　丸　山　薫
發行者　角　川　春　樹
印刷者　和　田　彰　三
發行所　角　川　書　店
東京都千代田區富士見
2の13 Tel (265)7111
振替東京 3-195208
東洋印刷・鈴木製本

0395-573105-0946(0)

目

次

書簡

信夫日和　七
中野の頃　二九
高い村から　四三
帰郷　六九
北国の人へ　一〇五
旅から　一二四
蟬川だより　一二九

航海日記

二八九

雑篇

伊藤整詩集『雪明りの路』　三二五
南窗集について　三二五
苜蓿の花環　三二六
愛する神の歌　三二七
萩原朔太郎氏著『郷愁の詩人與謝蕪村』について　三二七
立原道造詩集　暁と夕の詩　三二八
『暁と夕の詩』序文　三二九
北川冬彦著『古鏡』の性格　三二九
後記（『四季詩集』）　三八一
「屋根」の著者に　三八二
日本海洋詩集刊行に際して　三八三
點鐘鳴るところ　三八五
岩佐東一郎著『風船虫』について　三九三
桑原武夫著『人間粗描』　三九四
小田実『明後日の手記』　三九五
解説（『日本詩人全集八巻』）　三九五
伊東静雄詩集　四〇三
野村英夫詩集　四〇四
はしがき（『海員詩集』）　四〇五
まえがき（『世界の名詩』）　四〇六
あとがき（冬至書房版『帆・ランプ・鷗』）　四〇九
まえがき（『日本の名詩』）　四一一
伊藤桂一詩集定本『竹の思想』　四一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき（『三好達治詩集』）　四一六
金澤一の詩集　四一八
阪本越郎君の本質　四一九

解説　四二三
編註　四四〇
年譜　四五三
書誌　五二九
参考文献　五三九
書簡索引　五五七
索引　五六一

書簡

凡例

1、収録の書簡は、内容、発信時期等により、七つのグループに分け、各グループ毎に発信年月日順に配列した。

2、発信の日付は自記により、自記がない場合は消印によって、年月日の下に（消印）と入れた。
　消印も不明の場合は、内容等から推定して、（推定）と入れた。推定が出来ぬ場合は、不詳と記した。

3、発信・受信地、受信者名は自記によったが、発信地の自記がない場合は、消印によって、（――局発）とした。
　封筒の欠落などにより、発信・受信地の自記が見られぬ場合は、調べによって適宜これを補った。

4、書簡の種類を、〈封書〉〈封書・巻紙〉〈葉書〉〈絵葉書〉のように、分類・明記し、速達の場合は、〈封書・速達〉のように記した。

5、字体は、すべて新字に統一したが、かなづかいは、原文のままとした。

6、誤記、誤字、脱字等は、これを適宜訂正した。

信夫日和

一　昭和五年七月八日（消印）津村信夫宛（市内麹町区内幸町一ノ五）作品社気付〈葉書〉

郷里のさる心やさしき人の送り給へるボンタン飴てふ菓子は子供のたべるものぞかし。箱を開くに中にゴム風船一つ池紙に包みてあるより、とく脹らして小町糸にくゝりて部屋の隅の蚊屋の吊釘にかけをきにける。今朝は手水をつかひ近頃になき涼しさに、不図かの風船をとりをろして強く掴めば破れるものから柔らかに掌にのせつゝしばし時を過せしに、熱き湯のごとき触感に気付きぬ。さてかの牝熊の婢を呼びとめてためせしにその手を夙に引きて言ひけるは、汝が作りし日の暑かりしせゐならんと。さもありぬべき事なり。されば吊釘に懸けにけり。

二　昭和七年四月二十五日（消印）四人クラブ御中宛（麹町区内幸町一ノ五　津村様方）市内滝野川町菊谷端二〇八七〈葉書〉

「四人」いつもお手数です。3号では津村信夫氏の詩をおもしろく拝見しました。

今度、左記へ転居しましたのでおしらせします。

三　昭和八年九月二十六日　津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ二十一）四谷区簞笥町二十九より〈封書〉

夕陽に輝いたあの庭の柘榴の木は忘れられません。室生先生の精神凝つてつひに柘榴の実となる——そんな可怪しな言葉が、今朝起きると、おのずから胸の中に出来上つてをりました。

帰途、酒のために有終の美を完ふ出来なかつたことは、返へす返へすも遺憾でした。不覚の原因は空腹に在つたらしいです。

草々

九月二十六日

津村信夫様

四　昭和八年十月六日　津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ弍拾壱）四谷区簞笥町廿九より〈封書〉

先日お話に出た城ケ島——海と燈台の秋色を賞づるも悪くないと思ひます。紀の国への旅へ上られぬうち、一度御足労願へませんか。打ち合はせのうへ、近く一日の清遊を試みたく思ひます。

七・八両日は少し都合がありますが、その後なら午前中と夜は必ず在宅します。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

拾月六日　　丸山薫

津村様

五　昭和八年十月二十七日（消印）津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ二一）四谷簞笥町二九より〈葉書〉

昨夜は王子にゐたので失礼しました。佗しい心を土砂ぶりの雨に打たれて神とともに在りました。しばらく夜は居ります。どうぞお遊びに。　草々

六　昭和八年十一月八日　津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ弐拾壱号）四谷区簞笥町弐拾九より〈封書〉

〃美味かつた〃たちの休みなので、今日半日を新宿の松竹館で過しました。「初陣」といふのに往昔の「黒百合の花」懐しき花岡菊子さんが出演してゐて、少しは泣かされます。「大学の若旦那」といふのも、暢気な気持で看てゐるには適当でした。総じて日本の映画は賢く優しいニュアンスに富み、僕のいふ、よい意味の俗人の世界が感じられるのは快いです。

オルゴールとは悲しかつたですね。お母さんがなくて、夜は枕元のオルゴールに寝かされたやうなお嬢さんに、僕は会ひたいものです。

十一月八日　　草々

津村君

七　昭和八年十一月十六日　津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ弐拾壱）四谷区簞笥町廿九より〈封書〉

先日は失礼。詩境如何？　拙作「秋」といふのを解体して、別に大作「水の精神（こころ）」と題して季刊「苑」に送りました。今朝、椎の木社から貴方宛に手紙が届きましたので同封します。夕陽の聖ロカちよつとスフインクス大人の表情に一脈通じるところありますね。勿論、心中悲しいにちがひありません。右用件旁々

十一月十六日　　丸山

津村君

八　昭和九年三月十四日　津村信夫宛（東京市本郷区西片町拾いノ二十一）豊橋より〈葉書〉

だんだん丘の上の家にゐます。浜松から爆撃機がとんできたり、野の涯を砲車の轍が光つたりして、少年の日の夢につゞく日が多いです。ヒゲ中佐も近くに居を構へてゐます。二十日前帰京の予定。十四日

九　昭和九年四月十六日（消印）津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ二十一）中野局発〈葉書〉

昨夜は却つて御迷惑をかけたりして恐縮。いづれ拝眉の砌。明後十八日は朝フェアリーが帰るので一日中だめ。その後の日なら何日でもよいです。

一〇　昭和九年（推定）九月二十日　津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ二十一）四谷区塩町二―二十二塩町ハウスより（推定）〈封書〉

先夜は失礼。室生先生のお宅へは廿五日ごろ伺ひ度いと思ひますが、御都合はいかゞでせう？　雨天ならば延引といふことにして、午後からが宜しいでせうね。ともかく一応小生まで御返事下さるとたすかります。涼風とともに少しは詩も書けさうです。ぽつぽつ、戸隠の彼方から天狗も舞ひ戻つて来さうです。

九月廿日　丸山拝

津村雅兄

一一　昭和九年十二月十日（消印）津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ弐壱）四谷局発〈葉書〉

先夜は失礼。外史将軍から永々拝借の品、たしか貴下に托しましたね。ちよつと必要あつてお訊ねする次第。おひまのとき御返事あらば幸甚なり。

一二　昭和九年十二月十二日（消印）津村信夫宛（本郷区西片町十いノ二十一）中野局発〈葉書〉

御返事により捜したところすぐに在りました。思ひちがひしてゐて失敬。世紀の雑務でおちつかず困つてゐます。

一三　昭和十年五月十日　津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ二十一）四谷区塩町二ノ二十二、塩町ハウスより〈封書〉

倶楽部まで御足労。別に用件はなく只、をりからの日曜を語らはんと思つたまで。

先日久しぶりに魚眠洞先生を訪問しました。ちかごろの悪戦に思ひなしか少しく淋しさうに見受けました。

一昨日はまたかの虚妄先生来訪。打ち連れて武蔵野館に「お姫様大行進」といふ悲しき映画を見物しました。

近況如何？　詩は書け候や。

五月十日　不一

津村君　丸山薫

一四　昭和十年六月二十五日　津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ二十一）四谷局発〈葉書〉

昨夜御馳走さまでした。秀夫さんとのお話もおもしろかつた。お礼申します。「郷愁について」拝見。なかなか美事。しかしあれで小説が書けると思ふは早計なり。辻野の手紙をお部屋におきわすれてきました。会のをり御持参下さい。秀夫さんにも是非御出席の栄を賜りたい。二三の人がそれを期待してゐます。

廿五日夕

一五　昭和十年七月十一日（消印）津村信夫宛（本郷区西片町拾いノ二十一号）四谷局発〈葉書〉

萩原朔太郎氏の会を催します。是非御出席下さい

場所　神田区神保町　会芳楼

時日　七月十五日午后六時

会費　二円

発起人　三好達治

丸山　薫

辻野久憲

一六　昭和十年十二月二十九日　津村信夫宛（渋谷区南平台町四ノ十六）中野局発〈葉書〉

先日無理して拙宅へこられたのがさはつたのではないかと心配してゐます。充分に休息されよ。二十七日句会では小生美事に一等賞なりき。

軍艦に松飾りする海の曇り　（季題松飾）

とはいかゞです。　草々　丸山薫

二十九日

一七　昭和十一年三月十三日　津村信夫宛（渋谷区南平台町四十六）中野より〈葉書〉

冠省　外史君の論文を至急小生手許までお送り下さい。当分同人雑誌には書きませんからそのつもりで四季の発兌を遅らさないやうに願ひます。　十三日

一八　昭和十一年四月一日（消印）津村信夫宛（東京市渋谷区南平台町四十六）愛知県碧海郡知立町山町六十一高井方より〈葉書〉

フェアリーさん昇天。君が来駕された翌朝、二十九日の午前十時でした。手紙を投函すると殆んど同時に電報を受取り、とりあへずこちらへきました。悲しく

て今は何も云へません。

一九　昭和十一年四月二十二日　津村信夫宛（渋谷区南平台町四十六）中野区塔之山町十六より　〈封書・速達〉

信夫君　昨夕御返事したことは取り止めにして欲しい。理由はどうにも悲しくてやり切れない、友人に会つても満足に口も利けぬ状態だからです

愛し切れぬ者を失つて何のこの世か。何の現世ぞ。と日々に深くなりまさる気持をどうしやうもありません。終日、写真とともに住んで歎く。段々に健康を損つてゆくやうだし、元気も幽かになるやうだし、遠からず僕も亡き人のゐる国へ近けることゝ衷心歓んでゐます。

ああ、文学は嫌だ、詩は嫌だ、生も嫌だ、人に顔を見られるさへ嫌だ、僕をしばらくこのまゝにして欲しい。

四月廿二日　丸山薫

二〇　昭和十一年四月三十日（消印）津村信夫宛（東京市渋谷区南平台町四十六）知立局発　〈葉書〉

先夜は多分のものを頂いてなんとも御礼のしやうもありません　白い牡丹を買つて供へました　亡なつた人もにつこりと頬笑んだことでせう　四日長野へゆき五日帰ります

二一　昭和十一年六月十八日（消印）津村信スケ宛（東京市渋谷区南平台町四十六番地）宮城県柴田郡船岡村平井君内より　〈葉書〉

平井君の館は空が明るく、雀がいそいでとんできます。牡丹が美しく咲いてゐます。何となく一茶が居さうな田舎です。昨日、仙台をみました。松島へも行つてみました。明日塩竈から汽船にのつて宮古湾までゆくつもりです。

二二　昭和十一年九月二日　津村信夫宛（渋谷区南平台町四十六）中野局発　〈葉書〉

あれから多忙に日を送つてゐます。ある事情があつて、少し変つた経験をしました。おひまがあつたら遊びにおいで下さい。

九月二日

二三　昭和十一年十一月四日（消印）津村信夫宛（東京市渋谷区南平台町四十六）中野より　〈葉書〉

少し軀を悪るくしたので臥てゐます。旅行はどうで

した。原稿は一切書きたくないが、小説だけは書きたいと思つてゐます。

失敬

二四　昭和十一年十二月五日　津村信夫宛（渋谷区南平台町四十六）中野塔ノ山町十六より〈葉書〉

王冠のごときお菓子を有難う。今朝紐解いてみて三つ在つたので、あれは昨夜いたゞく可きであつたと思つた。荊妻は歯痛、僕は話に夢中になつてゐて、状態ははなはだ悪くありました。

十二月五日

二五　昭和十二年三月十日　津村信夫宛（目黒区原町一三五六）中野区塔の山町一六より〈封書〉

先夜はたいそう御馳走さまでした。早く手紙をかかふと思ひながら怠りました。令室へよろしくおつたへ下さい。

昨夜、萩原先生来られて、晩くまで話しました。このごろ、神保夫妻はどうしてをりますか？　一度、訪ねたいと思ひつゝ、まだその機を得ません。

先日、打合せ会の席上で、白鳥巡査部長に会ひました。お話をしやうと思つたが、氏と小生との間に、川路鬼、照井鬼の二匹が挾まつてゐたので諦めました。

小生は十七日に西下。やはり四国へ廻らなくてはならないので、帰京は少しおくれます。只、放送はA・Kへ中継しないらしく、恥を諸彦の前に曝さずにすむのはたいへん嬉しい。旅先ではせいぜいおたよりをするやうに心掛けませう。

ゼゲンは吝でシヤクにさはることばかり。汽車がトンネルへかゝつたら、レールへ突き落してくれん！

台北の舎弟から手紙が来て、過日襲来した敵機は爆弾百個を二列ぶつつゞけに落してゆき、その物凄き光景は云ふもおろかだつたさうです。

海軍士官が凱旋したので、近く戦争談をききに行かふと思ひます。

では失礼。

草々

三月十日

丸山

信夫様

二六　昭和十二年六月十五日　津村信夫宛（目黒区原町一三五六）中野区塔ノ山一六より〈封書〉

拝復

お手紙有難う。浦和の先生のことも少し言ひ過ぎた

きらひなきに非れども結局、気持がさばさばしました。小説、今だに書けず、書けなければ放つて了はふかとも考へてゐます。

目下、ヘツポコ役人四国から上京中、どうやら支那へ行くことになりさうです。

君のきらひな犬が昨夕から同居してゐます。おとなしくて人間の子供のやうです。抱いて寝てやらうかと思ふくらひです。

そのうちにお邪魔に上がります。

ハンド・バツクは近く入手出来るでせう。出来次第急送致します。奥さんにその旨をお伝えおき下さいと荊妻が申してゐました。

草々

六月拾五日

丸山

津村信夫様

二七　昭和十二年七月一日　津村信夫宛（目黒区原町一三五六）中野塔之山一六より　〈封書〉

先夜は御馳走さまでした。久しぶりに君の詩を聴いたりして、西片町の頃のことを思ひ出しました。

ゆたかに降つてゐる雨の音を聴いてゐるのも好いものです。心も濡れるといふ古い形容詞を思ひ出します。

両三日、本を読んでくらしました。

山岸君の〃未完成の絶望〃（コギト）はすぐれてよいものです。

彼もえらくなつたと思はれました。

令閨にもよろしく。

草々

七月一日

丸山薫

津村信夫様

二八　昭和十二年九月十七日（消印）津村信夫宛（東京市目黒区原町一三五六）豊橋より　〈葉書〉

田舎では家の中に井戸が在つてコホロギが啼いてゐます　兵士たちがお祖母さんや弟たちに送られて戦地へ赴きます　舎弟のひとりも行くことになりました

二九　昭和十二年十一月六日　津村信夫宛（目黒区原町一三五六）中野区塔之山一六より　〈封書〉

おハガキ有難う。君は商業街の夕景は小銭を計算してゐるやうに佗しいと申されたが、小生などは、その小銭のおこぼれでも俯向きになつて拾つてゐる悲しさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com